

NPO法人



2015年 9月10日
第27号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

もくじ

私の戦後70年と縄文柴犬研究センターとのこと ☆JSRC理事長代行 橘 宏	2
縄文人の狩猟-3 ☆東京国立博物館客員研究員 金子浩昌	3
シバの散歩道-(27) ☆JSRC理事 根深 誠	8
関西交流会報告	
交流会を振り返って ☆関西交流会事務局長 土山仁美	12
戀鳴荘より ☆京都府 金 平雄	13
関西交流会に参加して感じたこと ☆京都府 長井一詩	14
関西交流会に参加して ☆大分県 石井 勲	14
世話人の一人として ☆奈良県 榊井 誠	17
お便りコーナー	
☆大分県 石井 勲 ☆「良子」の近況No.18 竹内誠一	18
☆キューの行動観察ノート 石川県 黒梅 明	19
☆「五味さんへ」 秋田県 榊田耕太(小学3年生)	21
☆秋田県 藤原庸子	22
事務所報告	
☆新入会 ☆会費 ☆寄付金 ☆寄贈	22



会誌28号の発行予定は、12月10日です。原稿の締め切りは、45日前(10月25日)です。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

私の戦後70年と縄文柴犬研究センターとのこと

理事長代行 橋 宏

70年前、私は新潟第一師範学校予科2年でした。その頃の私は、すぐ煽てに乗ってしまうし、人の嫌がることでも引き受けては、後で“しまった”と思うことが多々あったが、その時は何でも経験だから、と自問自答しながら、後悔はしたくないから、と、とにかく引き受けることが多かった。

そんな、多少オッチョコチョイな私が、大した敵を作らずに八十路を超えて、今、北海道に生きながらえている。

15年前に縄文柴犬に巡り会えて、皆さんと共にこの素晴らしい犬との共生の喜びを味わっているのです。現在、“JSRC”となってNPO法人として認可されているから、もう、だれからも難癖をつけられる事はあるまいと思う。そんなことを考えている矢先に、何と、とんでもないニュースだ。“ポツダム宣言をつまびらかに読んでいない”と、恥ずかしげもなく公言する首相が、海外でも戦争をする！という「安全保障関連法案」を自公が多数を占める衆議院で強行採決して、国会の審議日程の延長も図りながら参議院でも同じように強行するか、重要法案では許されない「60日規定」を視野に入れて、議会軽視と思える答弁が目立っている。「平和の為に」「国民の安全に必要」と、平和憲法を持つ国の政治家らしからぬ言動が多い。

地球上のどこにでも戦争をするために行けるようにする、集団的自衛権を砂川判決から都合良く解釈し、妥当であるというが、憲法9条を持つ国民として許さ

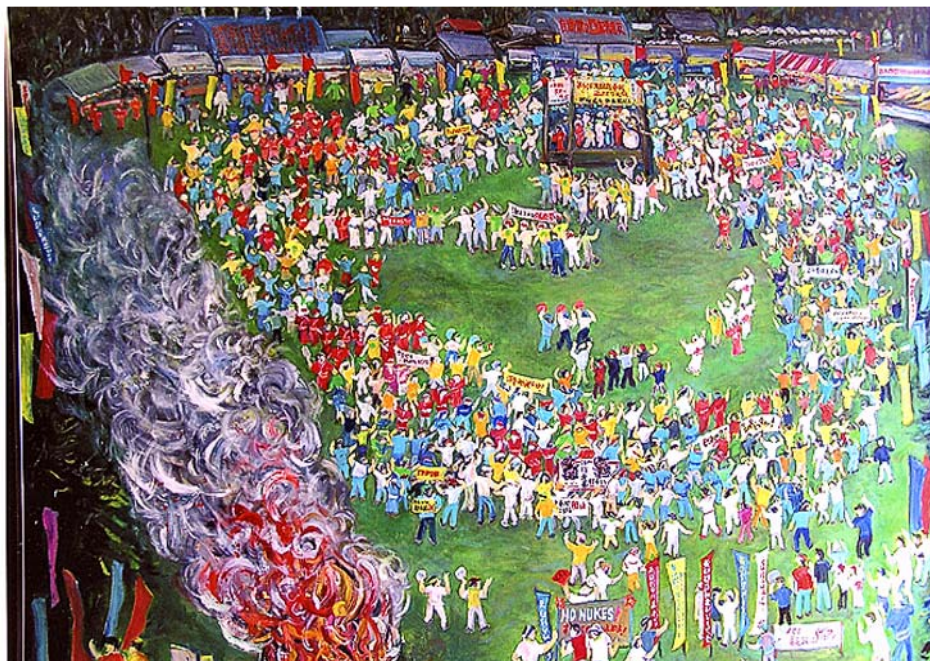
れないことだ。

70年前、日本の空も海もまったくと言っても良いほど無力になっていた。そういう状況で東京大空襲が。3月10日は陸軍記念日だった。戦意高揚を削ぐ狙いか、5月27日は海軍記念日だから、何かこの日にあるぞ、と私は思いながら、友人と午後は海へ行こうと、話していた矢先に空襲警報が。外に飛び出してみると、既にB29の姿が。そして黒い物体が轟音とともに…。思わずかたわらの草藪に飛び込んで頭をかかえた。

そっと空を見上げる。一面に光るものが舞っている。…これが5月26日に連合国の発した「ポツダム宣言」と、日本国民への降伏を呼びかけたビラ。だけど、信じることは無いし、まだまだ何とかかなるか——という気でもあった。しかし、何としても耐乏生活がいつまで続くかが大問題だった。一般人がそんな状況だからワンたちの受難は大変だったろう。飼育放棄で野犬となったり、人間の食糧となったり、…当時は赤毛の犬はウマイ…という話が伝わっていた。

こういう時代を再び出現させる時代逆行はとうてい認めるわけにはいかないことは明らかだ。

我が家の竜太は何とか15才の誕生日まで生きながらえそうだ。もっともっととは思っているが、北海道でも連日の真夏日。無理かな？とは思いますが、人為的に生きる望みを絶つということはとても考えられない。でも、何もせずに声も挙げなければ、とそんな気持ちで今、大きく膨らんで来ている。(2015.8.7)



F100号 油彩
矢白別にて
—— その2
橋 宏画

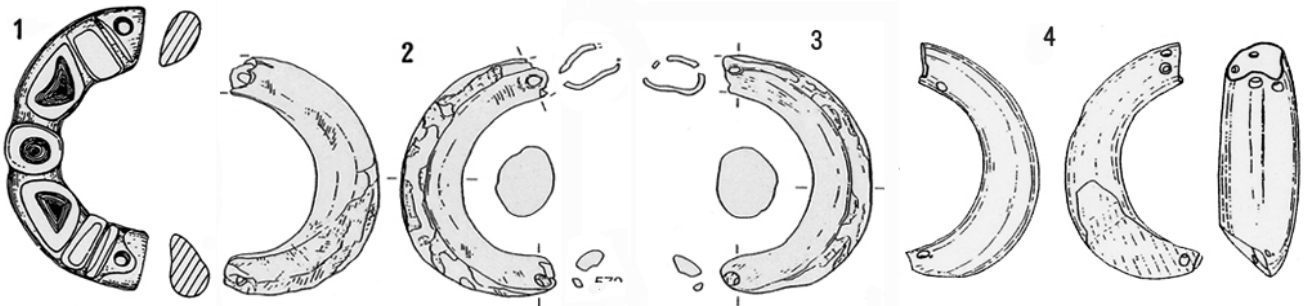
日本一広い陸上自衛隊の演習場のど真ん中で行う”第50回矢白別平和盆踊り大会”の印象を描きました。

縄文人の狩猟 - 3

金子浩昌 (東京国立博物館客員研究員)

1:布瀬の腕輪(柏市布瀬貝塚)82mm 2:歯牙製垂飾・イノシシ上犬歯72mm 3:イノシシ上顎犬歯(千葉市有吉北貝塚)

4:歯牙製垂飾・イノシシ上顎歯牙70mm(千葉市草刈貝塚)



骨角製の装身具の意義

多様な縄文人の骨角製品のなかには、それを使うあるいは身に付けることによって、その人物の社会的な位置付けを表現するものがあるのではないのでしょうか。垂飾品、装飾品などの全てがそうした意味合いを含めてつくられたと推定されるのですが、製作のための技術的な高さ、文様に表現される内容など単純なものから複雑なものまでがあるようです。そのなかで、私が特に注目したいのは腕輪であって、重要な装身具になっていることはよく知られる通りです。目に付きやすいので貝製品として多数つくられました。

豊かな海産資源に恵まれた日本列島では、貝輪製作に適した貝種にも恵まれましたが、貝輪の作成のための貝の種類は限られてきます。縄文時代の本土ではオオツタノハがもっとも見栄えのするものであったと思いますが、装飾的な加工ができないので、やはり迫力に欠けるのではないかと思いました。様々な装身具がありますし、それを装身した例もありますが、やはり腕と胸に装着するのが効果的ではなかったかと思えます。私はその一つを提示したいと思います。

それは千葉県柏市布瀬貝塚出土の鹿角製の腕輪です。1960年(昭和35)、私たち発掘調査団の手によって貝塚の発掘が行われました。時期は縄文中期前葉、阿玉台期に属する貝層から出土しましたが、特別の遺構などに伴ったものではありませんでした。完全無欠な状態でした。細くなる両端などは破損するものですが、この製品にはそうした損傷は全くみられませんでした。

この腕輪は鹿角製です。腕輪としても珍しい素材でつくられています。他に例をみないでしょう。鹿角は幅が広いものではなく、幅狭の狭長なものをつくる際には有効な素材となります。しかし角の分岐する部分は枝が分かれるので幅がひろがります。そして平たい部分ができます。その部分を使えば四肢骨では得られない厚みのある素材をとることができます。そのまま

使うのであれば、これを直ちに目的の製品として加工すればよいのですが、厚すぎるので半裁する必要があります。周囲をきれいに擦り切り、割ったと思います。上手にすれば2枚をとることができるはずですが、片側に厚みを残したいということになると目的の製品は1枚しかとれないことになります。この製品では文様の彫刻のために厚みが必要であり、一枚をとるだけで終わったのではないのでしょうか。

中心の部分をくり抜きます。そしてもっとも重要な彫刻がほどこされます。文様はすでに土器の表面につけられた隆帯と三叉する文様です。粘土を篋で彫刻するのよりもはるかに手間のかかる仕事でした。

骨角製品に土器の文様を彫刻すること自体まれなことです。晩期の例で大洞式の三叉する文様を彫刻、あるいは浮き彫りにする例がみられます。鹿角製の腕輪はかってつくられたことがなく、類品を含めてこの地域の人の発案であったといえるでしょう。布瀬貝塚ではこの例の他に海棲獣類の骨と思われる製品が1点ありました。輪の形状を残しているのですが、残念ながら素材を明らかにすることができませんでした。しかも焼けて破損していました。別の一点は布瀬貝塚例よりも早くに知られたもので、香取郡山田町向油田貝塚出土の鯨骨製品です。鯨骨製品は現存品は半欠した状態ですが、あるいは環状に作られていたかも知れません。現品には文様などありません。おそらくクジラ類の肋骨が素材で、きれいに環状にくり抜かれていたものでした。これも大変に珍しく、布瀬貝塚製品と双璧です。製作された年代も中期の阿玉台期です。こんな変わったものを作ったのは、鬼怒川谷沿岸の中期縄文人でした。海が深く入り込み布瀬貝塚のある湾奥でも釣り漁ができる環境でした。ですからクジラの骨片も運ばれてきたかもしれません。これを丁寧にくり抜き、整形したわけですが、手本になるようなものはなかったでしょう。創出したものだったのでしょう。考えれば布瀬貝

塚の腕輪もおなじだったのです。

布瀬貝塚の縄文人がなぜ鹿角で腕輪をつくろうとしたのでしょうか。自らを象徴できる文様を完全に表現し、それを腕にはめて損なうことのないような素材は鹿角以外にないと考えたためではないか。これを身につけていたのは年配の人だったと思うので、恐らく自らの製作ではなかったかと思うのです。体力のある若い者の協力を得たかも知れません。硬い鹿角を削り、かつ均整のとれた文様を彫刻することは大仕事だったに違いないのです。こうして出来た腕輪を誰が身に付けたか、皆に慕われ、生活全般にわたって指導的な役割を果たしていた人物でしょう。大形成獣の個体を捕獲する機会は年に幾度もない筈でしたから、衆目も集まったと思います。そのような時、腕輪は威信を象徴した筈です。

イノシシ上顎犬歯の腕輪

布瀬貝塚で鹿角製の腕輪が作られていたころ、少し南の東京湾岸の奥にいくつもの縄文中期の貝塚が作られます。それぞれ名だたる貝塚ですが、それを残した縄文人も腕輪の着装を好んだようです。

イノシシの雄の上顎犬歯は全体のサイズといい、湾曲の度合いといい、布瀬貝塚の鹿角製腕輪とそっくりです。上顎犬歯の両端つまり歯根部の末端と歯冠先端に穿孔します。歯根の末端は幅があるので2孔開けられている例がありますが、歯冠の先端は狭く1孔です。歯冠の先端は下顎骨犬歯との咬み合わせで薄くなっています。全体の自然の形をそのまま使ったものです。穿孔も歯根の末端は薄く、歯冠の先端も薄いので容易であったと思われます。これまで、垂飾と云われてきましたか腕飾かも知れません。千葉県千葉市内で報告されたのは5点です。

狩猟と漁労が一体化していた房総半島南部、 東京湾湾岸中部の貝塚遺跡 貝塚遺跡の立地—

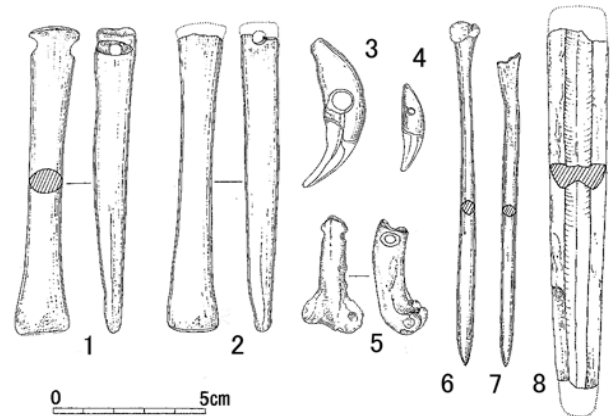
千葉県富津市富士見台貝塚と骨角製品

私は1959年(昭和34年)に千葉県富津市富士見台貝塚の発掘を行いました。地元に住まれて考古学の調査に当たられていた対馬郁夫氏、内野美三夫、野中徹氏の協力を得ての発掘でした。後期中葉期の貝塚でしたが、その目的としたのは1956年(昭和31年)に調査した千葉県館山市鉦切洞窟遺跡に遺された縄文後期前葉期の漁撈と骨角器文化が東京湾内域にどのように展開するかを見たいと思ったからです。

漁撈文化の問題はまた別に述べるとして、ここで知られた骨角器文化には興味深いものがありました。釣

骨角牙製品

1・2:有孔指骨ウミガメ、3:有孔材木犬歯、4:有孔イヌ犬歯、5:有孔大腿骨ウミウ、6・7:骨針イノシシ(腓骨)、8:骨ヘラ・シカ中足骨。



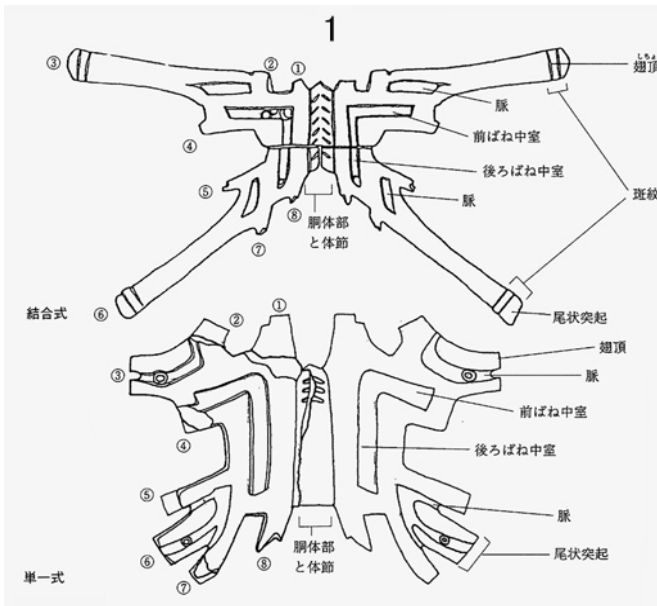
り針、銚頭、やす状刺突具などの漁具の他にオオカミの犬歯穿孔品1、イヌの犬歯穿孔品1、ウミガメ類指骨の穿孔品2、ウミウ大腿骨の穿孔品1がありました。垂飾品関係 5点はさして大きくないこの貝塚としてはすばらしいものでした。オオカミ穿孔品は大貝塚でも1点あるかという希少品ですから。おそらくこの貝塚が房総半島南部の山地帯にあることと関係があるかと思うのです。漁撈を生業としつつも、イノシシ、シカの遺骸の出土も多かったのです。ウミガメ指骨穿孔品は類例のないもので、その他の骨格は動物遺体中ではありませんでした。ウミウの大腿骨の穿孔品は骨体の中央で切断し、骨体部に穿孔して身に付けたと思われます。ウが巧みに潜水して魚を捕らえる様子を見て、この鳥に対する畏敬の思いからつくられたのでしょうか。今は行われなくなったのですが、かつて東京湾岸域では鶴縄漁といって鶴の羽を並べて縄を水面に張って魚を追いつぶる漁法がありました。この穿孔品は昔の縄文人とこの鳥との関わりを考えさせるのです。

南西諸島 沖縄島 縄文時代の狩猟

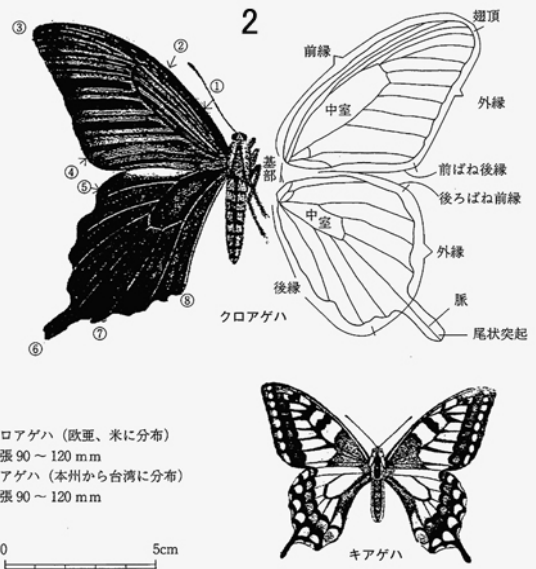
はるかな南の海に囲まれた島にも、島伝いに波及した縄文文化が独特の文化を育みました。陸の獣では小形のリュウキュウイノシシと木々の間を飛ぶリュウキュウオオコウモリが対象になっていました。海では魚貝の豊かなサンゴ礁が形成され、漁撈の文化が発達しました。島の丘、水辺に舞うチョウの群れに人々は自らの願いを託しました。さらに自らがチョウになろうと考えました。チョウの姿をつくり、身に付けることを考えたのです。動物の骨から道具をつくり出す技術を伝統的に持っていた縄文人では可能なことでした。縄文時代中期に四枚の羽を平たい石に刻んだものをつ

1:蝶形骨製品の基本形復元図(島袋1999)

1上段:荻堂式期、うるま市キが浜貝塚。下段:荻堂式期から室川試期、沖縄市室川貝塚。



2:チョウのはね名称図(小野田・村越1939)

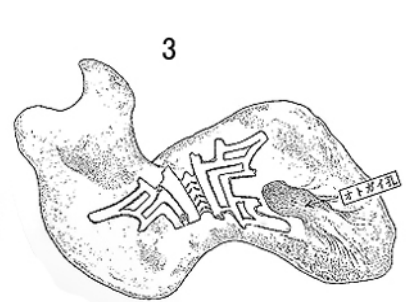
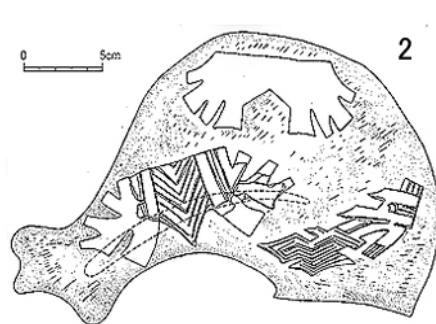
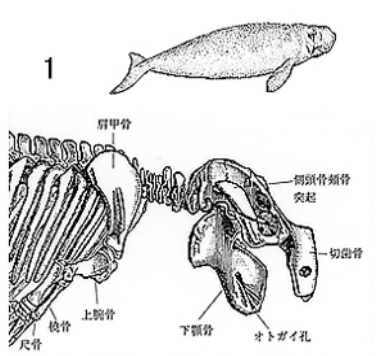


クロアゲハ (欧亜、米に分布)
 羽張 90 ~ 120 mm
 キアゲハ (本州から台湾に分布)
 羽張 90 ~ 120 mm

1:ジュゴンの生態図および骨格図の一部、

2:ジュゴン肩甲骨利用例(吹出原遺跡出土品より-金子1999)

3:ジュゴン下顎骨利用例(宜野湾市真志喜安座間原第一遺跡出土品より-金子2000)



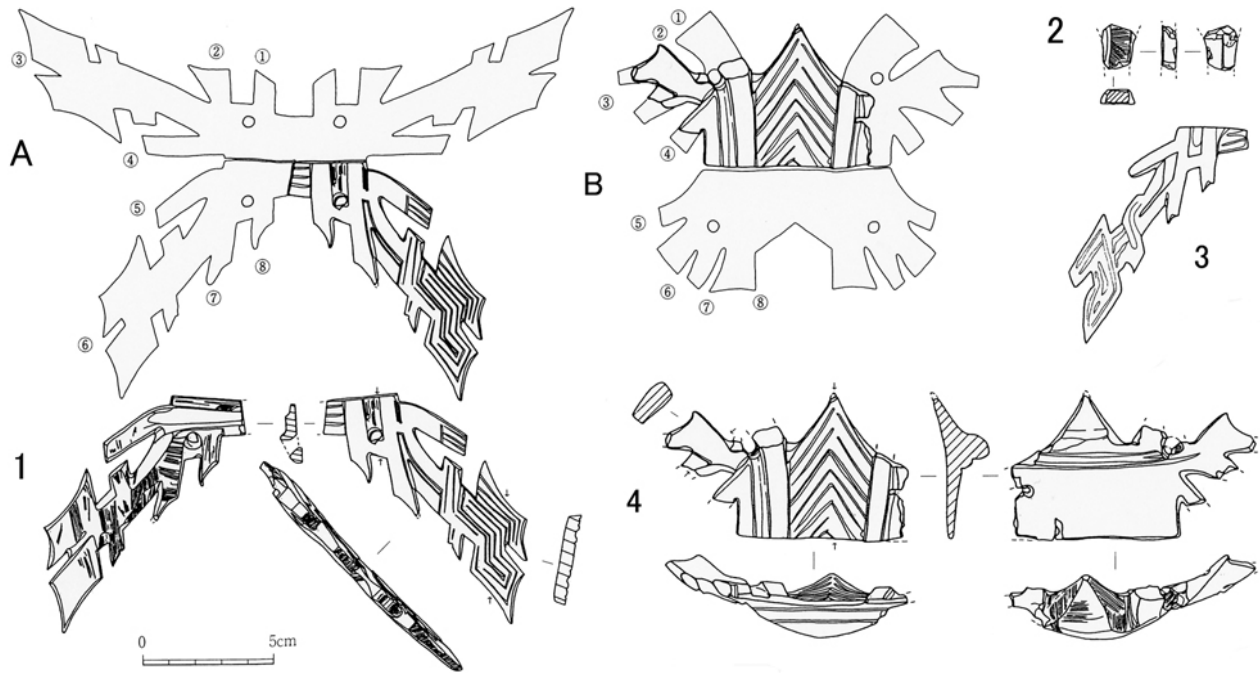
くりましたが、すぐに四枚の羽が動くように骨でつくることを考えました。後期中葉の頃といわれています。この研究の先鞭をつけられた方に沖縄県在住の考古学者島袋春美さんがおられます。復元されたチョウの羽は、開いた状態で幅20センチになるものでした。この復原は島袋さんの研究に因るものです。左右の前ばね一枚と左右の後ろばね2枚、計3枚を組み合わせ、孔をあけて結びました。そのようにすれば羽ばたくように動くわけです。その素材となったのがジュゴンの骨格でした。ジュゴンの骨格は硬く重いのです。サンゴ礁の浅瀬にもぐり、海藻を食べることができるためです。硬いジュゴンの骨を削ることは難儀な仕事でしたが、肋骨を使い、適当な長さに切断して削っていきました。どの位手間がかかったのでしょうか。ひたすら石製の小さな斧で削ったのです。このような方法を考え出したのは沖縄縄文人だけです。考古学では蝶形骨製品と呼んでいます。

素朴な形ですが、チョウのはねにつく特徴のある文

様一脈も彫刻していました。前ばねと後ばねと向きの違いも表現しています。ですから、出土した遺物で、現在は破損してしまったはねの一部でも前後左右を区別することができます。ジュゴンの肋骨の他にウミガメの上腕骨、イノシシ、魚骨の顎骨が素材に使われました。後期から晩期になると蝶形骨製品の素材はジュゴンの下顎骨、さらに肩甲骨に変わります。大きな骨格が素材となり、見栄えのするものになりました。製作の方法も肩甲骨では骨格の形態を熟知していたことがわかります。一方手のひらサイズのものもつくられ、入念に紐通しを工夫していたようです。

ジュゴンは肉も利用され、骨器の素材に使われたのですが、その捕獲は後世グスク時代の遺蹟から出土するのとは比べれば、個体数もはるかに少なかったと思われます。いずれにしても、ジュゴン猟があったことは事実ですし、貴重な資源であり、ジュゴンと共に長く生活してきた石器時代の歴史がありました。その後各地にグスク(城)のつくられる時代になると役人は、獲

結合式蝶形骨製品 A・B:室川式期(後期)から3字佐浜式期(晩期)の蝶形骨製品の復元図。1・2・4:読谷村吹出原遺跡、3:糸満市兼城貝塚、2:破片。Aは1の後ろばねからの復元図。Bは4の前ばねからの復元図。3は右後ろばねで更に複雑なかたち。



れたジュゴンの肉を首里まで運ばせたそうです。そして今は海岸域の環境条件は悪化して個体数は激減し、絶滅寸前の状況です。しかし、チョウと人々との関わりは、三千年の年月を経てなお変わらずにつづいています。静かな海を取り戻したいものです。

おわりに

縄文人の身近にはどんな動物—ここでは陸棲の獣—がいたのでしょうか。身近にいる動物、必ずしも身近に棲んではいないが生活の中で話題となり、あるいは人々との付き合いのなかで見聞きし、集団の規範に関わる時に人々の注目する動物はないかということを考えたのではないのでしょうか。動物といえは食べることとの関係でみることが多いのですが、道具として、その素材として使うことができるのではないかということに気を配っていたのが縄文人でした。遺物のなかには数少ない例、ほとんど唯一ではないかと思われる例もあり、そのような場合は製作者の技量も偲ばれますし、それを身に付け、あるいは手にして参列した人物には、人格の高さを誰しもが認めたことでしょう。イギリス中石器時代のスターカー遺跡出土のシャーマンがつけたという角の付いたアカシカ前頭骨のかぶり物、あるいはスイス新石器時代の鹿角とイノシシ切歯穿孔品を下げた復元かぶり物などもあります。豪華な彫刻で飾られた布瀬貝塚の腕輪が芸術的な表現ですぐれていると思うのです。ヨーロッパの中、新石器時代で

は腕輪垂飾品はあまりつくられなかったようです。骨角製品でも同じです。日本の場合、すぐれた縄文土器の造形技術があり、骨角製品も同様です。さらに沖縄島の蝶形骨製品もまた動物と人によってつくられた華でありました。

人と動物との深い関わりが、製品を多彩なものにしました。

メモ

千葉県柏市布瀬貝塚の鹿角製腕輪は私が滝口 宏先生のお仕事に協力し、私の計画した貝塚調査で出土したものでした。この地に良好な保存状態にあるこの貝塚におどろき、これまでに全く知られていないことと、この遺跡の将来の保全を考えて資料を整えるためにごく小規模の調査を計画しました。この調査では早稲田大学高等学院の学生であった塚田広康さんが他の研究会の学生さんと参加協力してくれました。そして報告書が刊行された後、私はニューサイエンス社刊の『考古学小辞典』(昭和58年、1983)に骨角器の項の執筆を担当し、1頁半の挿図をつくったのですが、その中に載せました。また『縄文時代(2)』(房総考古学ライブラリー、昭和62、1987)の90頁に掲載されています。

文献

いわて未来への遺産 遺跡は語る 岩手日報社 平成12年

千葉県の歴史 資料編4 千葉県 平成16年

まとめ

この時代の狩猟が個人猟であったか、集団猟だったかはむつかしい問題です。こうだったろうということをお話できる自信はありません。

縄文人の狩猟は、イノシシ、シカ、ときにクマ、カモシカなどの大形獣、ごく稀にオオカミの遺骸の出土することもあります。オオカミ猟が実際あったかは疑問です。ニホンザル、タヌキ、キツネ、テン、ノウサギ、そして今は姿を消したカワウソなどの中形獣、ムササビなどもみます。手近なものキジ猟一骨からですとヤマドリとの区別が一寸難しいのですが、湖沼、河川、海辺での水鳥猟は種類が多彩ですから、捕獲活動も多様だったでしょう。深い山間地帯、開けた丘陵地帯という縄文人の生活した環境にも違いがあったと思います。獲物の棲息の多寡も地域によって違いそうです。愛犬とともに山野、水辺を歩く縄文人を想像できますし、2乃至3の部落の人々が集い、巻狩りを試みる姿も考えられます。そして道具には丸木のままの弓を持つ人もいるし、漆を塗った飾り弓を使う人も一つ集落の中にいたことは間違いないようです。猟の指導者的立場にある人の獲物に対する畏敬の念の現れなのかもしれません。

個人的な猟が先ずあって、条件によって人々が集うようになっていったのではないのでしょうか。個人の働きは何といっても基本になるのでしょうか。それに何より愛犬との付き合いがあります。お互いが信頼し合った仲でした。イノシシに近寄り過ぎ牙にかけられたり、はね飛ばされて足を骨折した犬を大切に飼っていた例があります。

なお時期的な違いのあるのも当然と思います。出土する動物遺体の数が時代のちがう遺跡によって異なることはごく普通です。一つ集落のなかで、動物遺体の特に集中する場所が幾つかあるということも、縄文時代の早期には知られています。そのような場所から出土する動物遺体を調べてみると、1個体がまとまっているということは先ずなく、頭蓋や下顎骨の左右いずれか、四肢骨も左右いずれか、道具や飾りとして使う部分はずさされています。狩りに協力した人々が分け合っているのでしょう。一つの遺跡内では、どうしても見つからない部分もあります。離れた場所の人々のところに持っていったのでしょう。もちろん、それと逆のこともあるわけで、離れた場所から運び込まれた捕獲物もあったようです。そして、一つの遺跡の存続していた長さを考えると、年間の捕獲量は、数頭か、仲間からの分かち合いを加えても、ごく少ないものであったと思うのです。

ということは、狩猟ということがとても大変なこと

- 1: 国宝「合掌土偶」青森県・風張1遺跡、八戸市是川縄文館蔵H20cm
- 2: 「腕を組み座る土偶」青森県・野面平遺跡H8.2cm
- 3: 青森県大館村赤坂遺跡(大館中継線)江坂輝爾1957「先史時代」



だった。あちこちに棲む人が情報を集め合って狩りが行われ、分け合ったのです。技術的にも容易なことではなかったでしょう。話しはそれですが、今人気の縄文時代の遺物に「土偶」という遺物があります。お祈りしているような姿、何かわからない立ち姿、こうした遺物が、生活の不安から安全を祈るためにつくられたものだ、と言われていました。確かに当時の人達には凶り知れないことばかりだったと思います。今だってそうですもの。本当に切実な思いで過ごす日々だったのではないのでしょうか。そうした人々の遺していった遺物を、そうした実際の生活を窺うことができるようにするのが遺物を扱う時の私たちの心がけと思っています。その上で「土偶」のことも考えたいものです。先程ちょっと書きました獲物の捕獲の量、分かち合う様子は、実は、「土偶」の姿にも現れるのではないのでしょうか。他にもいろいろと考えてみなければならぬことがあるのでしょうか。狩りだけではなく、生活を支える縄文人の祈りの思いが、「土偶」にも現れているのではないのでしょうか。当時の人の気持ちになって、遺跡を考えながら、残された物を、考えなくてはいけないということでしょう。

その動物遺体を集めた跡も、小さなものから、規模の大きいものになっていったようです。それが時期的に最も新しい時期になると、骨の集積場のようになることがあります。時代が新しくなると、集団的な猟がいつそう活発になるということなのでしょう。しかし、そのような遺跡はごくわずかな数です。

いろいろなお話をうかがいたいのは、わたしと同様です。いろいろなご意見のうかがえるのがたのしみです。

2006.9.13の記事に追記したものです。

シバの散歩道 (27)

JSRC理事 根深 誠 (文筆家・釣り師・元登山家)

弘前公園の「桜まつり」を、私は昔ながらに観桜会と呼んでいる。その観桜会の期間中に、私が終始一貫して異を唱えている「犬猫看板」が出入口のすべてに設置されているにもかかわらず、犬(ペット)を連れた観光客が弘前公園を歩いている、という話は以前から訊かされていた。大いにけっこうなことだと思いつつ、その一方で、これはいったいどういうことなのかとの疑問が湧いてくる。

結果を述べれば、「犬猫看板」の設置者たる弘前市役所が容認しているのである。「弱きをくじき強きに従う」体質が骨の髄まで沁みついている地域社会だから、なるほど当然かもしれないと思う。いまの場合、「弱き」は自らの行政区域の市民であり、「強き」は区域外の観光客である。

遠来の観光客に対しては、市民に対するのと同じように、看板に記された「犬・猫等の入園を禁止します」を上から目線で履行することなどとてもできない相談なのだ。これは差別ではないのか、と私なら考える。

日ごろから私の「犬猫看板」反対に同調している弘前市内の知人が観桜会期間中に飼犬を連れて公園を散歩し、案内所で係員に意地悪な質問した。

「ペットを連れて桜見物に東京から来たんだけど、出入口にある、あの看板は、あれはどういうことですか。あんなの全国各地を歩いていて初めて目にしたが、どうなっているんだね」

生まれも育ちも弘前市内の知人は東京に住んでいたこともあるが、いまは弘前市在住である。この場合、津軽弁を口にはしてはいけない。決して覚られないよう

に「いい弁」、つまり東京で使われている言葉を使うと著しく効果がある。弘前の人たちはたいていが権威主義だから東京を「中央」と呼んで羨望し、自分たちより高級な頭脳の人たちが住んでいると勘違いしている。それは昔もいまの変わらぬコンプレックスの裏返しである。

案内所の係員は「犬猫看板」が「中央」には通用しないことを自覚しているので、矛盾を感じつつも「いいんです。いいんです。看板を通過するとき抱いてください」と私の知人に言ったそうである。これが津軽弁だと正体がわかるので、地元の人であることが一目瞭然だから「字が読めないのか」などと、皮肉たっぷりの厭味を言われることになりかねない。

使い分けているのである。現に、くだんの知人は地元の中年女性二人に注意されている。二人のその中年女性は知人の素性を知っていたのだった。市役所と同じで素性をわからなければ観光客と思い、注意はしない。

注意された知人は堪忍袋の緒が切れて、思わず絶叫したそうである。

「ババァ、だから弘前は遅れていると言われるんだ。このクソババァーッ」

中年女性二人は震え上がって呼吸を荒げて逃げ去ったという。

「ほんとに困ったものですよ。どうすればいいんですかね。この問題は観光面でもマイナスでしょう。世の中、悪くしているのは市役所じゃないですかね。市会議員も知らんふりですね」

シバは今年(二〇一五年)の七月で満十一歳になる。その間、シバと散歩しながらこの問題に直面し、解決を訴え続けてきた。腰の重い行政もちかごろは黙殺できなくなったようである。とって、素直に非を認めるわけにはいかないらしく、目下のところ、威厳をちらつかせることに笈笈としながら「実験」なるものを繰り返すだけで解決しようとしているわけではない。まるで酔っ払いの千鳥足のようにふらついている。これでは税金の浪費でしかない。だから「税金泥棒」と言われたりするのだろう。

旧態依然とした体質を改善できずにしがみついているのである。市役所だけでなく一般市民の多数を含めてである。脱皮しきれずに毎年、「実験」と称して、子供相手にアメでも上げるかのように小出しに、町内の小公園や空地に散歩コースを設定し、それを遵守するよう、相変わらず旧藩時代の高札まがいの物々しい



タバコをふかしながら不思議そうに「犬猫看板」を見る花見客

看板を掲げている。

ここには行政と市民の、時代錯誤とも言うべき上下関係が潜んでいる。行政はあくまでも上から目線の傲慢さを崩さず、市民をそれに従わせるという態度を改めることができないようだ。参画精神などと知ったようなことを口では唱えているが、まったく衆知統合がなされていない。

※ ※ ※

観桜会の期間に私が弘前公園に足を運ぶのは何年ぶりだろうか。結婚まもなくのころ、公園の近所のアパートに住んでいたこともあり、料理をこしらえて幼い子供らを連れ立って家族で何度か出かけたことがある。

弘前公園が一般市民に親しまれていないのは、一つには「犬猫看板」に見られるようにペット連れの散歩者を排除し、隔離策を講じているからである。その理由の一つとして「弘前公園は国の史跡だから」という「虎の威を借る狐」を演じて、市民に対しては恬として恥じることがない。

今年の観桜会は、会期早々、花が散りかけていた。私が出かけたときは終盤で葉桜だったが、連休時であり、「花より団子」の花見客で賑わっていた。濠をはさんで公園の真向かいにシバの生家がある。観桜会は書き入れどきなので店には活気があった。国の重要文化財に指定された住宅なので、見学する観光客も少なくない。

店内にシバのキョウダイ犬がいて、雌のせい、シバとは異なり、すこぶるおとなしい。シバの匂いがするのか、私にすり寄ってくる。本来であれば石場さんの仏前に焼香すべきところだが、商いの邪魔になってもいけないので早々に辞去し、買い求めた缶ビールを

飲みながら公園を歩いた。日本酒「石場屋」を一升ブレゼントされた。

石場家から濠にかかった橋を渡ると亀甲門である。観桜会の期間中、入口にテントを張って、ボランティアガイドが観光客に対応している。若い女性の三人がいたので訊くと三人とも無償なのだという。

私にはどうも合点がいかない。ボランティアだからといって無償でいいはずがない、と思うのだが、かりに私が市役所の担当者に問い合わせたとすれば、返ってくる答えはわかり切っている。あくまでも威厳を保ち、上から目線で「それなら来なくていい。そのことをわかっていて手伝っているんだから」と、とりつく島のない返答が、おそらくは用意されている。上司になればなるほど、相手に屈辱を与えて平然としている御仁が多い。部長ともなればたいへんなもので常に振り返っている。じっさい、それを市民は敬う。

三人のボランティアガイドのなかで、はきはきと受け答えする一人は、言葉のアクセントも地元とは異なるので、訊くと札幌から来ている学生だった。「犬猫看板」について訊いてみる。

「そこに犬猫を入れるなという看板がありますが、ペット連れの観光客にはどのような対応をしているんですか。看板を見て引き返すペット連れがいると訊いています」

看板の文言を見て引き返すペット連れの観光客はいるのである。しかしなかには、訊く人もいるので、抱いてください、と言って通しているとのことだった。市役所からそのような指示は受けてはいないけれど、市役所の職員がそのように対応しているのだと、そのボランティアの女子学生は私に答えた。

「しかし、入るなという文言の看板を立てていなが



弘前公園の北門前にあるシバの生家

ら抱けばいい、というのは理由にはならないね。入ることには変わらないからね。矛盾しているね。札幌ではそういうことをしていますか」

その女子学生は頷き、札幌ではこういう看板は見たことがないとはに kanssa 答えた。

「弘前ではどうしてこんなことをしているのでしょうか」

地元の学生が無口なのにくらべて、札幌から来た女子学生は気丈夫である。

「いい質問です。理由としては、マナーを守らない飼主がいる、とか、弘前公園は国指定の史跡であるから、とか、言っているけど、それはこじつけで正当な理由にはなりません。例えば靖国神社にしても日蓮宗大本山の池上本門寺にしても世界文化遺産の姫路城にしても、ほかに大阪城でも熊本城でも松山城でも京都御所でもこんなことはしていません。公園はペット連れの散歩者に開放され、姫路城ではケージを用意して城の内部にできえ入れるように受け入れ態勢を整えています。ではなぜ、弘前市では全国の常識に外れるような馬鹿げたことを、堂々と税金で立て看板を設置してやっているのか。ここにこそ問題の本質があります」

三人とも興味深げに訊いていた。講義を受けているような神妙な顔つきをしている。

「私は弘前市役所の犬猫看板に異議を唱え、撤廃を求めている一市民です。わが家にも飼犬がいます。ほら、その真向かいにある昔風の古い家、あすこで生まれた犬です。柴犬だからシバと呼んでいます。血統書に記された名前は、お城の真ん前で生まれたので古城獅子号と言います」

「へえ、おもしろい名前のワンちゃんですね。何歳ですか。雄ですか、雌ですか」

「今年の七月の誕生日で満十一歳になります。人に



乳母車に二匹の愛犬を乗せて花見する婦人

警えれば六十歳を超えていて私と同じくらいでしょう。雄です。キョウダイ犬の雌がそこにいますよ」

「はい、この前、家を拝見したとき見ました。かわいいですよ」

「かわいくもないでしょう。もうお婆さんですからね」

「それでは本題に入りましょう。私からみると、あの犬猫看板は差別であり市役所の越権行為です。なんの法的根拠もありません。だから、他所の自治体ではやっていないのです。法的根拠もなく行政が市民を縛りつけることなどできないでしょう。あの看板は昔の旧藩時代の高札、その現代版と見ることができます。テレビの時代劇でときどき見るでしょう。民衆が集まって見上げるようにして眺めている看板、あれです。では、なぜ、そんな時代遅れなことをするのか。私が推察するに、哀しいかな、威張りたいたいのですよ。極めて簡単です。津軽人、とくに弘前の人たちは『虎の威を借る狐』が好きなんですよ。そこがこの地域社会の後進性です。強きにペコペコ、弱きに横柄、傲慢なんです。犬猫看板がまさにそのことを証明しています。他所から来た観光客には容認している」

「そうですね。そういうことなんですか」

三人とも妙に感心して訊いていた。

「わかりましたか。市役所の職員に言う必要はありませんが、弘前の犬猫看板にまつわる問題は知っておいたほうがみなさんの将来の糧にはなるでしょう」

「わかりました。ありがとうございました」

「礼には及びません。じゃ、どうも」

その場を立ち去り、私は演芸場に行った。祭り期間中、ここでは郷土芸能が催され、この日は登山囃子競演大会が行われていた。車座になって登山囃子を聴きながら一杯やっているのは、近在の各村々から花見を



「ペットを入れてもいいんですか」[抱いてればいいんです]

乳母車に愛犬を乗せて娘といっしょに花見



かねて集まってきた大会参加者のグループである。莫蔭が敷かれてあるので私もそこに座り、缶ビールを飲みながら登山囃子の演奏を聴いた。

津軽地方の最大行事である岩木山登拝の囃子だけに、いずれも甲乙つけがたい競演である。昼食をはさんで午後の部もあるそうだが、午前の部が終了したところで、私は会場をあとに園内を散策した。弘前城の本丸では今年から石垣の修理工事が行われ、工事期間は十年かかるという。濠が埋め立てられ、観光客が歩行できるようになっていた。



愛犬を労わる子供。花見で疲れたらしい

各地区の代表が岩木山登山囃子を競演する



何組かのペット連れの観光客を見かけた。案内所でも訊いたのだが、ペット連れの入園は容認されていた。園内で会った、秋田から来たというペット連れに話しかけると、「犬猫看板」の設置は知らなかったと驚いていた。

「えっ、だめなんですか。知りませんでした。入ってしまったんですけど大丈夫でしょうか。どうしてなんですか。おかしなところですね、弘前は」

「弘前はおかしなところで、それを鼻にかけているくらいがあります。だから非難されても改善しないのですよ。私が調べた範囲では、税金で犬猫看板を市内のいたるところに設置している自治体は全国で弘前だけです。それが自慢でもあるようです。出入口にありますから出掛けに見てください。これ見よがしに堂々と立っています」

仔犬を連れた家族連れの観光客だった。秋田から車で来たそうである。

「混雑しているようですから気をつけてお帰りください」

「ありがとうございます」

秋田訛りの人懐っこいアクセントの籠る言葉だった。刺々しさが無い。

諸料金一覧

会費	・ 入会金	1,000円
	・ 年会費	5,000円
登録料	・ 血統書発行 一頭	1,500円
	・ 犬舎名	2,000円
	・ 登録再発行 一頭	1,000円
	・ 単独犬	2,000円

血統登録について

- ①. 仔犬が生まれた方は御一報下さい。(用紙送付)
- ②. 申し込みには登録料が必要です。
- ③. 血統登録、犬舎名登録は五文字以内で、漢字には必ずふりがなを付けること。
- ④. 両親犬のカラー写真(5×6cm以上)を添付。
- ⑤. 二週間以内に、カラー印刷で発行しております。

交流会報告 交流会を振り返って

関西交流会事務局長 土山仁美

今年のJSRC交流会は、去る7月4日、滋賀県高島市朽木麻生に在る金氏所有の巒鳴荘でとり行われました。これまでの開催地・東北を離れ、関西ということになり、どれだけの参加があるか不安でした。当初は10名も集まれば成功との考えでしたが、それが大盛況となり全国各地から21名(注)が集まりました。

こんなに大勢の皆さんが来て下さるとわかってからは、世話人一同(金さん、榊井さん、長井さん、和田さん、土山)、どんなに嬉しく奮起できたことでしょうか。遠路をいとわず来て下さり、本当にありがとうございました。



準備段階から、自然豊かな現地は良い天気であれば最高の場所だけれど、雨が降れば困るなど思っていました。天気予報でずっと雨マークが並んでいるのを見たときはショックで、この日程をこなす雨対策の不十分を実感して、今となっては笑い話ですが～睡眠不足になってしまうほどでした。開催日当日は、昼から雨の予報。関西交流会の世話人の皆さんと気持ちを焦らせながら現地に向かったところ、先発組は焦って道に迷い、一時間遅れで到着しました。会場には、すでに橘さん、五味さん、相澤さんたちが待機してくださり、簡単なお挨拶で準備を始めなければならない次第でした。心の中では、本当は会誌やメールで知っていた先輩方に会えて、感動がこみ上げてくるけれど準備に動かないといけない。開催時間に間に合うか皆が一生命に働いて下さる。雨対策のシート張りも、諸先輩方

は慣れた手つきでどんどん進めて下さり、未熟な自分の恥ずかしさよりも、嬉しくなって、安心感が増えていったのを鮮明に覚えています。遠路はるばるお疲れであるのに、「みんなの交流会だからね～」と頑張って下さるので、感謝の気持ちで一杯になりました。

始まって暫くして降り出した雨。まず自己紹介と愛犬自慢ですが、雨降りのため犬を近くに係留できなかったのは残念でしたが、それに関わらず、一気にそれぞれの交流が深まっていく様子に、集まるってことは本当にいいなあと改めて思いました。皆さんの自己紹介で、石井さんが狩猟に半生を懸けていた話とか、和田さんからは比叡山の2000坪ほどの敷地に、シカが出没し困っていたが、縄文柴犬を飼育したら、直ちに消えた話など・・・誌面の都合で書き切れません。

自己紹介と平行し、五味さんへの質問が殺到?しまし

開会の挨拶・橘理事長代行

パネル・写真を使って説明する五味氏 (photo:土山)



た。五味さんの回答と、滅多に伺えないそのお話は、事前に準備されたパネルや写真が、具体的で解りやすく、「犬を科学的に捉える」という視点がとても勉強になりました。本当は、もっと時間的な余裕があれば良かったのに、と、それが悔しく残念でした。やや遅れての参加者の方を待ち、横断幕と共に念願の記念写真を撮りました。

時間をかけて取り組んできた中で、JSRCの仲間との出会いの素晴らしさを改めて確認できた瞬間でした。一人では何もできなかったけれど、世話人の皆さんと力を合わせ達成できて本当にうれしい限りです。

今回の交流会の大きな特徴は、20代の青年や若いご家族の参加、又、会場での入会もあって、時間がいく

らあっても足りない程、本当に活気に満ちた集いになったのではと思います。是非、再びお会い出来ることを願っています。最後に、他の団体の見学者が2名ありましたことを付記します。(2015. 8. 1)

(注)参加者(順不同、敬称略)。

橘(北海道)、五味(秋田県)、相澤(新潟県)、黒梅(石川県)、肥田(長野県)、金(京都府)、長井(京都府)、榊井(奈良県)、和田ご夫妻(滋賀県)、梅村(滋賀県)、和田(和歌山県)、石井(大分県)、畠中(鳥取県)、仲井ご夫妻とお子様2名(鳥取県)、山田(京都府)、鳥谷部(畠中君の友人岩手県)、土山(和歌山県)以上21名の他に、見学者2名(中山ほか柴保・兵庫県)

巒鳴荘より

交流のはじまり (photo:土山)



ほどなく梅雨明けの頃となりヤレヤレです。

先日は草深い朽木の山林の地へようこそといいますが、はるか遠路をいとわずお越しになられた皆さん、その意気軒昂ぶりには舌を巻かざるを得ません。ご覧のとおり、当地は何の変哲もない雑木林に過ぎないと

京都府 金 平 雄

翌日は解散前に記念植樹 (photo:土山)



ころですが、その日は予想外の多人数が集う賑やかさが極まる日となって、久し振りに樹々や虫たちも微笑み返して呉れたことと思います。

さて、当日は合議・パーティと盛りたくさんに、人と人、そして犬、あるいは犬同士様々な交流の友情が暖か

く立ち昇っていただいたことでしょうか、如何お思いですか。日が十分に保障されていたので催しの準備は不十分乍らも思いの外、心を添えて行えたといささか各人自負するところではないかと思っています。

それにしても全く以って全国各地からの参加には夢のような想いすらしました。それだけに駆けつけられた人々に少しでも満足の行くようにと日を経るにつれ準備の緊張は一筋縄ではありませんでしたね。

しかしそれにしましても集まった人達は長時間に互り、犬を始めいろんな事柄を想い想いに語り合いましたね。語るほどに相互の絆が深まってゆくようで本当に触れ合いの大切さ尊さが改めて思い知らされ、その都度この日の目的が達成されていったことでしょう。犬達もあんなに大量の仲間を見て、興奮したり、緊張したり、尻込みしたりと一口に縄文柴犬と言えども性

格は多彩でした。

石井氏(大分)持参のDVDを見て、猪猟の緊迫感や解体の鮮やかな手さばきは見応えも十分でした。猪がみるみる巨大な肉塊に変貌していく姿は貴重な場面でした。実に犬に関わる経験の様々が間を置かず展開していくなどはまさにこの交流会ならばこそのご利益だと思いました。パネルを使って犬の特質を講演された五味氏からも、そのご利益として、一目瞭然のように学習が弾み、犬についてのこのような方面からの接近は大変誇らしいことでした。

すでに集いより4日間が経過しています、皆様ご無事でお過ごしでしょうか。かくいう私も2~3日はまごまごせざるを得ませんでした。本日はまずはお礼をかねて・・・(2015.7.10)

関西交流会に参加して感じたこと

京都府 長井一詩



全国からたくさんの方が、滋賀県高島市の山荘に集まり、楽しい時間を過ごすことが出来ました。縄文柴犬を飼育している方たちとの交流は、とても有意義なものとなりました。

今回お会いした方達とは初対面の方が大半でしたが、愛犬自慢の話を聞かされた際に皆様との会話もはずみ、大変楽しい交流会でした。

初日は雨が降り、夕食の準備も大変だったでしょうが、猪肉とシカの肉のバーベキューは格別なものでした。

夜遅くまで若い方も会話がはずみ、日頃経験したことのない体験もしました。ザコ寝も経験し、学生時代に同級生同士がテントで寝たことを思い出し、青春時代にタイムスリップした気分でした。

関西での初めての交流会に向けて、いろいろ準備された土山さん、和田さん、榎井さん、ご苦労様でした。

五味さんには、縄文柴犬についての質問に、わかりやすく解答してもらい、楽しい二日間を過ごすことができ、有意義な交流会でした。(2015.7.30)

関西交流会に参加して

大分県 石井 勲

7月2日今回は自宅から500km足らずの距離なので気分的には、余裕のある旅だった。国東半島の付け根、佐賀関半島からフェリーで四国から淡路島。大鳴門橋で渦潮を横目でチラチラ見ながら山陽道、名神高速、

京都東ICを降り161号湖西街道。真野から477号途中367号若狭街道・別名サバ街道、この謂われについて、発酵学者の小泉武夫先生が、発酵は錬金術であるという著書だと思ったが、猫マタギのサバを、発想の転換で京

都人が好む旬の旨いサバより、より旨い食品に転換してしまったと言う、滋賀人の知恵の面白い逸話を書いている。縄文柴犬の、飼育・繁殖・保存についても、固定概念にとらわれず、原則性を堅持し、好奇心と発想の転換とを携えて挑戦したいと思う。朽木新本陣で2日分の食料を買い込み巒鳴荘を目指して県道23号に入る。カーナビでは検知無し。田舎のことだし、聞けば簡単に教えてもらえるだろうとの安易な考えが間違いのもと、23号沿いの集落で尋ねるも人が居ない。たまに会う人に尋ねても、親切に聞いてくれるが、全くらちが開かず。ビバーク地を探す。日本ジカの生息数が多いため、ヒルの被害にあうのでキャンプ地の設営地探しに車でウロウロ。杉林の一軒家、広い、比較的乾燥した土地があったので、訳を話して挨拶を入れると、最初、初老のおバンが出て、訳を話していると、同年配のおバンが出てきて話に加わり、そこへ1台のワゴン車が到着しおちゃんが下りてきた。彼女ら曰く「この三浦のおちゃんが地元生まれの人だから、何でも解るから聞いてやるから」と地図を見ても巒鳴荘はわからず。結局、その家にやっかいになることになる。彼女らは、気功指圧療法士でおちゃんの為に京都から出張し、度々この画伯のアトリエ兼住処に一泊しているとのこと。囲炉裏で火を囲んで、12時までには祝杯、芸術、人生論から大人の人生論まで、普段は飲まない私も、雰囲気溶けこみ勧められるまま飲み、支離滅裂の縄文犬論陣を展開。こんな犬がいることに関心と興味津々。三浦のおちゃんも狩猟をしてたとか、おばちゃんも犬大好き人間達。ビデオや犬の写真JYOMON SHIBAの26号までのファイルした季刊誌まで披露、犬を介して通じ合える、人と人との出逢いがあり、旅はだから楽しい。



ケージから放たれる犬たちと筆者の狩猟スタイル
(石井勲のイノシシ犬 2011.2 DVDより)



1日半ケージに閉じ込められて、犬達もストレス溜まり、籠を覗くと小さくククン合図する。決して大声で吠えたり騒いだりしない、忍耐強い犬どもだ。私の胸にピンピン響いてくる…翌朝の7月3日木地山、林道の奥で解放する。車から飛び降り、排便と排尿をすまして、谷に飛び込み谷水をがぶがぶ飲み一段落すると、私の周りに集まり暫く同行するが、オヤジ、レッゴとチラリ目が合うと急峻な杉山の藪の中に消えて行く。豆タンクもメンタも後追いつくが、体がついていかない。10分もすると戻り、おやじの周りに付かず離れず、シカの気配を執ると暫く追うが遠追いはしない。親犬は遙か彼方の尾根の奥で2~3なき声が微かに聞こえ、シカの後追いが確認できる。一時間もすれば帰るだろう、心配無用だ。我々1人と2匹は胸付き八丁の急峻な僅かに残る古道木地山峠を目指して、コーヒータイムを取りながら、若狭からサバを背負い、京の都に通った昔の人々のもう1本の、このサバの道に思いを馳せながら登る…

突然足元に2匹の親犬が現れた。彼等は山歩きの時、殆ど音を出さない。尾はたれ僅かに尾を振る。これは山を充分駆け回った満足感と、おやじに対するある種のシグナルだ。まださほど疲れは感じない。家を出る前日から絶食して今日で3日目なのに“まあ、良く歩クワ”つぶやくと、豆タンクとメンコを連れて、さっさと、杉林の中に消えて行く。豆タンクとメンコは10m位上を私と並進してシカの気配を執り、藪漕ぎをしながら進む。100m位の上で杉の木の間から親犬を確認する。シカを追跡する体制だ。様子を見ていると、一谷超えた尾根で小さく一声、シカを起こしたのだ。小石を転がしながら山を駆け下る。50mほど先の平地に生まれただけの子シカを前脚で抑え込んでいる。写真撮影の為、急ぐが急峻な坂道で足が進まない。豆タンクが飛び降り子シカに牙を掛けようとするが親犬が威嚇する。気の強い豆タンクが更に向かっていく。つぎの瞬間、親犬に首根を咬えられて振り回され地面に抑え込まれる。今

筆者の愛犬・イノシシ犬



まで、自由勝手な行動して来た仔犬達が群れの中での掟(序列)を教え込まれた決定的瞬間だ。手加減しているので怪我はない。解放された子シカは藪の中に消える。標高700m近い木地山峠まで登る。天気が良いければ、若狭の海も見えるだろう。木株に腰を掛け、コーヒーブレイク。

犬達の疲れも見えて、それぞれに近くに寝そべる。こんな上まで杉、檜の植林では、シカの食糧は殆ど無く、だからシカの生息地が里型になり被害が拡大するのだ。戦後の農林行政の弱点の表れだ。

大休止後、ルート変更して下る犬達も充分運動をしたし、それに近くのシカは追い散らしてしまっているので遠追いはせず、目の届く範囲を車で下る。運動は9時~16時まで約7時間コース、夕食は野菜入り牛缶1ヶずつ、オヤジはカップラーメンに鮭缶。

7月4日10時巒鳴荘に合流。 天気があまり良くなく、テント張り与会場の設営に係員さん達が忙しく立ち働いている。ご苦労様です。この23号線溪谷沿いにはバブル崩壊前に乱開発した別荘が今は住む人もなく、朽ち果てた残屋があちこちに、その残骸をさらしていた。

天気さえ良ければ、ロケーションとしては雑木林中で申し分ないが、雨がポツポツと落ちてきた。シカの生息数が多いのでヒル対策に手を焼く。湿度の高いこの時期、何匹かの犬が血を吸われていた。14:00、20名ほど参加者の集合写真撮影。天気の具合で各自、自慢のワンコ(犬)が加われなかったことが残念だ。自己紹介と質疑の中で、五味氏は仔犬の心臓の鼓動を聴くことだといった。

私は40年近い繁殖の中で、心音を聴くことなど一度もなく、出産時、五体に触れる手の触診と、五体の観察で選別の規準にしていた。心臓の鼓動を聴く事、この事実には大きなカルチャーショックだった。

異物を食べる、餌を急に食べなくなった。等々、質

間があったが、其の事により、急激にやせるとなると問題があるが(腸内寄生虫とか急性病原ウイルス性に起因する)無ければ彼等には自らの体調を整える為の自衛手段で、自然界の治癒力の法則性がある。さして悩むことはない、野生の哺乳類を観察すると良くわかる。一般的に飼育、運動量に対して高カロリーの飼料を与え過ぎの感がある体型は丸く、筋肉の締りが無い。私の給餌は1日1回、1ヶ月2~3日絶食、新鮮な水は充分与え、肉は生のまま腐食肉でも関係なく与える。ドッグフード飼育は歯石がつきやすいので時々検査、自家製の掻きブラシでかきとる。穀類の腐敗物を与えない。犬は肉には高度な消化酵素をもち消化力は抜群、炭水化物の消化はあまり良くない。

縄文柴犬の尾については狩猟犬としての運動性能に就いていえば、垂れ尾が有利だ。古い資料によるが、直良信夫先生の著(狩猟)によると青森県の獅子小沢の堅穴住居址から出土した動物土偶の犬は立ち耳で巻尾であった。また、宮城県の門前貝塚出土動物土偶犬の耳は欠損していたが、尾は右巻きだったと言う。これら、動物土偶犬から推測すると縄文時代のイヌにも巻き尾の個体も居たということ、所詮イヌも多様性の個体があったということでしょう。現在の柴犬の極度の巻尾2巻に就いては、またの機会に推論しよう。

早朝、シカの警戒鳴きで起こされる。私の寝ているすぐ下まで来て「ピ〜」鋭い警戒音を発して川のほうへ逃げていく「バカタレ〜」。

会場の裏方さん、独楽鼠のように良く立ち働いて頂いた土山さん、玄米おにぎりや朝食の美味しい饅頭を調理して頂いた榎井さん、有難う、心から感謝します。有難う。また来年の懇談会で。(2015.7.18)



榎井さんの自慢・玄米おにぎりが実に美味しい! (photo:土山)

右手に玄米おにぎり、独楽鼠のように良く立ち
働いて頂いた土山さん! (photo:五味)



お蕎麦屋さんの出入り口で受け付けをするコロ
栗駒の剣竜-くりこま・2013. 9. 15生(剣の紅太郎×樫尾の雪花)



世話人の一人として

奈良県 枳井 誠

7月の交流会、お世話になりました。和歌山の土山さんの熱意と行動力に動かされて少しでも手伝いが出来て良かったです。

遠くから駆けつけてくださった皆さんの縄文柴犬にける情熱や愛情に触れて、ますますJSRCのファンになりました。これからも交流が継続できますことを願っています。



枳井さんの玄米おにぎり、朝食の麺など忘れられない美味しさでした! (photo:五味)

(報告) 愛犬家のリレーで無事生還 —

先日、我が家の愛犬・コロが、早朝から出かけたまま2日間(正確には36時間)帰ってこず、大騒ぎになった。

私は日頃からコロが自由に遊べる時間を、と夜明け前から外に出してやるようにしていたのだ。

いつものことで、私がそば打ちなど一仕事を終える6時前にコロは店先で私を待って散歩にでかけること

を日課にしていた。ところが、である。この日に限って待てど暮らせど姿を見せないのだ。

そのうち戻ってくる、とタカをくくっていたが、不安が高じていつもの散歩コースに単車を走らせる。いないのだ!どこに行ったのか!

コロはというと、どこを通過して何に引きつけられてたどり着いたのか、我が家から3kmほど離れた隣の集落まで遠征していたのだ。農家の放し飼いにしているメス犬と畑の中でたわむれていたようだ。

幸い、農家の方が愛犬家で、保護してくださり、フェイスブックで「迷い犬を預かっている」と、発信していただいていた。

一方、私は警察と保健所への連絡、五味さんにも対応の相談、近所の散歩仲間に対策の相談をしたり、JSRCの同志・土山さんにSOSを送り、ネットで発信してもらうように依頼(私はアナログ派)したり、「この犬探しています。」ポスター(実はこのポスターは散歩仲間がパソコンですぐに作ってくれた)を、地区内の飲食店やコンビニに貼って回る。

ポスターを貼って回っている途中最初に貼ってもらった店から連絡がくる。<この方も愛犬家、フェイスブックをやっている>コロに似た犬を集落の農家で預かっている、と。続いて土山さんから、ネットで反応があった、確かめて!と、立て続けに情報が。運がいいぞ、コロ!短い時間の中で偶然にも愛犬家のリレーで私の許に帰ることができた。感謝!感謝!である。

今回の件で、しばらくは自由放任を改め、常にリードをつけての散歩になったが、コロにとってはそれでもいいのか?と自問している。私にとってかけがえのない相棒であるコロとの日常の暮らしを大事にしていきたいと改めて思う。(2015. 8. 8)

枳井 誠